

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 7 日現在

機関番号：62618

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520421

研究課題名（和文）南琉球諸方言要地アクセントの緊急調査研究

研究課題名（英文）Urgent Research on the Accents of Major Southern Ryukyuan Dialects

研究代表者

上野 善道 (UWANO ZENDO)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・理論・構造研究系・客員教授

研究者番号：50011375

研究成果の概要（和文）：与那国島方言の名詞と動詞活用形のアクセント体系を明らかにし、多数の資料を提示した。基本的に3型アクセント体系であるが、複合名詞においては前部要素のアクセントが保存されず、動詞活用形でも同じ系列で一貫することは見られないことが分かった。次に、北琉球の喜界島諸方言のアクセント体系について、アクセント核と語声調が一つの体系内に併存しているとする新解釈を示し、かつそのアクセント史も明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The accentual system of nouns and verb conjugation forms in the Yonaguni-jima dialect is clarified with a large amount of data. Basically it is a three-pattern accent system, where we find no accentual correlation between compound nouns and their first members or among the conjugational forms of verbs. As for the Kikai-jima dialects, a new interpretation of accent system of nouns is presented, that is, a system where accent kernel and word-tone coexist. The historical relationships among the Kikai-jima dialects are also clarified.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：琉球方言，アクセント体系，アクセント史，消滅危機方言，言語学，音声学

### 1. 研究開始当初の背景

琉球諸方言のアクセントは、その体系のあり方からみても、日本語アクセント祖体系の観点からみても、非常に興味深くまた意義深い現象に満ちているにもかかわらず、ごく一部を除いて深い記述がなされないまま消滅の危機に瀕している状況にある。緊急の調査が求められているゆえである。

### 2. 研究の目的

本調査研究は、次の3点を目的として企画された。

(1) 消滅の危機に瀕している日本語諸方言、とりわけその危険度の高い（南）琉球諸方言のアクセントを実地調査し、その体系と仕組みを明らかにする。

(2) 琉球方言アクセント祖体系ならびにそれを含む日本語アクセント祖体系を考える

基礎を固める。

(3) 貴重な音声を録音保存し、できるだけ多くの資料を残す。

### 3. 研究の方法

現地を訪ね、消滅の危機に瀕した貴重な方言アクセントをよく保存している話者を探してそのアクセント体系の解明を目指した聞き取り調査を行なう。調査は1対1の面接調査による。調査は録音をし、方言資料の保存を図る。

### 4. 研究成果

(1) ①南琉球は、与那国島方言を中心に記述調査を行なった。与那国島は90歳を過ぎた一人の話者に専ら聞いた。

名詞は3型アクセントを基本とする（この点は先行研究にも指摘あり）。私の調査結果は、A型は東京方言の無核型タイプによく似ており、B型は概略的に言って低平調である。C型は東京方言の末核型タイプに似るが、大きく異なるのは、語末ではなく、文節末に下降がある点である（軽音節の助詞が付いても名詞の末尾で下降は生じない。なお後述）。この特徴を持つ名詞のアクセント資料を1000語余り提示した（具体的には下記の雑誌論文を参照。以下同様）。

併せて、複合名詞ではその前部要素との間にいわゆる式保存法則が成り立たないことを示した。dunaN=(与那国, A)とdunaNTu=(与那国の人, A)やtagara\_ (宝, B)とtagaramunu\_ (宝物, B)等々の一致する例もあるが、biNga=(男, A)とbiNga'agami\_ (男の子, 息子, B), sagi=(酒, A)とsagikami] (酒甕, C), tabugu] (タバコ, C)とtabugubuN\_ (タバコ盆, B), 等々の一致しない例もたくさんある。

ただし、与那国方言の複合名詞には、はたして多単位形に分析できるか不明のものも残り、それらが1単位形だとすれば、3型の枠組みに納まらない型が存在する可能性がある。これは今後の課題である。

動詞活用形のアクセントも、むしろ名詞以上に詳しく調べた。名詞と同じくA, B, Cの3型アクセントでありながら、その活用パターンは複雑で、A系列はAで一貫するものの、他は一貫性が見られず、計6種類のタイプに分かれることが明らかになった。それぞれの詳しい資料も公開した。具体的には、150語について26の活用形を示した資料と、300語強について7つの活用形を示した資料を提示した。

また、先行世代の報告と比較することにより、音節の軽重が関与する興味深いアクセント変化が起こっていることが明らかになった。1世代前はA, B, Cの3者が単独を含めて全ての環境で対立していたのに対して、

私が調査した世代では、語末が軽音節語(-CV)の場合はAとCが合流して単独では同じ音調になり、語末重音節語(-CVR, -CVV, -CVN)でのみ単独でも区別されることになった。興味深いのは、語末軽音節語にやはり軽音節に終わる助詞（音節数は不問、複合助詞かどうかは問わない）を付けてもAとCの区別は現れないことで、両者の区別の有無を知るためには、語末重音節の助詞を付けるか、自立語（こちらは音節構造は不問）を付けて別の文節にするかのいずれかをしなければならない点である。

もう一つは、その世代間変化において、上昇・下降とも右に（つまり、語末方向に）ずれていることを明らかにした。これについては、日本語の他の諸方言とも関連させた上で一般化し、国際誌 *Lingua* に英文で発表した。私の知るかぎり、日本語で左へという逆の方向の変化をしているのは、その担い手である分節音が音声的に「弱」でアクセント核を担えない場合に限られる。東京方言のモーラ音素（特殊拍）や、金沢方言の有声子音+狭母音音節ないしモーラ音素の場合がそれに該当する。

この知見を応用して、韓国語のアクセントに関しても、15世紀の中期朝鮮語の方が慶尚道に代表される現代諸方言のアクセント体系よりも古いという、これまで自明とされてきた前提を疑問視し、むしろ中期語の方がアクセント史的には新しいとする仮説を提唱した。

②北琉球では喜界島方言を再調査し、特にその中南部の6方言を対象として、そのアクセント体系ならびにアクセント史について最新の考えを『言語研究』で述べた。

その体系上の要点は、一つの体系の中にアクセント核（昇り核）と語声調が併存する2型アクセント体系であること；これらの諸方言では撥音（ン）の振る舞いが特殊で、語声調の末尾の上昇は担えるのに昇り核は担えないことが、片や形性（かたちせい）、片や核という、両者の性質の違いを示している、とするものである。

また、アクセント核の局所的な働きとは直接関わらない、その前の部分の姿を特立して「形状特徴」と名付けた。この形状特徴は、単語単位の核の位置によって決定されるが、一度決まるや、その後の変化によって核の位置が後ろにずれたとしてもその特徴は変わらないことも明らかにした。これもまた、語声調の形性とは異なるものであることを示している。

従来、語声調の提唱者により、語声調とアクセント核（狭義のアクセント）は水と油のような関係で、1つの体系内に併存することはないとされてきたものであったが、それと

は異なる考えを打ち出した。この考えは、喜界島方言以外にも適用されうるものと考えている。

通時的には、交替現象のない伊実久(いさねく)方言が中南部諸方言祖体系に当たると見て、その段階からすでに語声調と昇り核が併存した2型アクセント体系であったと考えた。その上で、片やその前の前中南部祖体系を、片やその後の諸方言に至る変化を述べた。

その変化の過程は、上昇も下降もやはり右(後ろ)にずれる形で生じており、ただ、その上昇と下降の歩みの違いが諸方言の違いを生み出したものと考えた。この変化の仕方という点においては、語声調とアクセント核との間には相違が見られないようである。

その他、喜界島の2型アクセント方言においても、複合語において前部要素の型が保存されるという複合アクセント法則は見つからないこと、外来語とアルファベット頭文字語は、調べた124語のほとんどがβ型で入り、α型は「オルガン」と「アリバイ」ぐらいしかないと述べた。43語について17の活用形を示した動詞とともに、40語余りの漢語のアクセント資料も公にした。

それとは別に、北部方言に分類される3方言のうち、佐手久(さでく)方言の分析も発表した。これは30年以上も前の調査によるものであるが、すでに話者は他界されており、別途昭和生まれの話者から聞いているデータとの比較対象をするために、まず古いものから先に発表したものである。

佐手久方言は「限定された3型アクセント」という特徴を持つ。すなわち、[taTa]mI, [taTamI... (畳, 「.」は言い切り形, 「...」は接続形), [taTamI]nga., [taTamI]nga... (畳が)のように1拍目に昇り核のあるα型, [ha]Ta[na., [ha]Ta[na... (刀), [ha]Ta[na]nga., [ha]Ta[na]nga... (刀が), [mu]Cjigu[mI, [mu]Cjigu[mI... (糯米), [mu]Cjigu[mI]nga., [mu]Cjigu[mI]nga... (糯米が)のように語末拍に昇り核のあるγ型の他に、単語の次末拍に昇り核のあるβ型の3つの型がある。そのβ型は3拍語以上にだけ存在するのみならず、他にも興味深い特徴を見せる。3拍語は, ka[ga]mi., [ka]ga[mi... (鏡), [ka]ga[mi]nga., [ka]ga[minga... (鏡が)のように単独言い切り形でのみ区別されて、それ以外の環境では完全にγ型と合流してしまう。一方、4拍語は, [hu]mI[ba]Ku., [hu]mI[ba]Ku... (米箱), [hu]mIba[Ku]nga., [hu]mIba[Ku]nga... (米箱が)のように、単独形であれば言い切り形でも接続形でもγ型と区別されるが、助詞付き形になるとγ型に合流して区別を失う、という特徴をもつ。このような交替パターンは、私の知るかぎり、この方言にしか見られない

ものである。

また、β型は、その語末が長母音音節に終わるか、二重母音音節・撥音節に終わるかによって、上記の軽音節に終わるものとはそれぞれ振る舞いを異にする。喜界島の他の方言では特殊拍の中で撥音が特別であったが、佐手久方言では長母音が二重母音・撥音かによって分かれる。これらを単純に重音節として一つにまとめるわけにはいかないのである。

この方言についても、5拍語までの名詞アクセント資料を付した。

(2) 上記の調査研究により、日本語アクセント祖体系を考える上での基礎固めが進んだ。これについては、いずれ私見を発表したいと考えている。

(3) 調査した方言に関して、すべて電子録音資料を残し、資料として保存した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 9 件)

- (1) 上野善道 (2013) 「喜界島方言のアクセント資料(1)」, 『国立国語研究所論集』 5: 121-154. 査読有
- (2) 上野善道 (2013) 「琉球与那国方言体言のアクセント資料(2)」, 『琉球の方言』 37: 109-142. 有
- (3) 上野善道 (2013) 「奄美喜界島佐手久方言の名詞のアクセント」, 『国語研究』 76: 1-15. 有
- (4) UWANO, Zendo (2012) "Three types of accent kernels in Japanese", *Lingua* 122: 1415-1440. 有
- (5) 上野善道 (2012) 「琉球喜界島方言のアクセント—中南部諸方言の名詞—」『言語研究』 142/1: 45-75. 有
- (6) 上野善道 (2012) 「与那国方言動詞活用形のアクセント資料(3)」『琉球の方言』 36: 57-90. 有
- (7) 上野善道 (2012) 「与那国方言動詞活用形のアクセント資料(2)」『国立国語研究所論集』 2: 135-164. 有
- (8) 上野善道 (2011) 「与那国方言動詞活用形のアクセント資料」『琉球の方言』 35: 105-121. 有
- (9) 上野善道 (2011) 「与那国方言のアクセントと世代間変化」, 上野監修『日本語研究の12章』: 504-516. 有

[学会発表] (計 2 件)

- (1) 上野善道 (2011. 05. 30) 「喜界島方言アクセントの調査と分析(1)(2)」NINJAL チュ

ートリアル 第2回「琉球方言の調査・研究法—喜界島方言—」，神戸大学百年記念館。

- (2) UWANO, Zendo (2010. 2. 20) "Types of accent kernels and their geographical distribution in Japanese", International Symposium on Accent and Tone (ISAT) 2010, NINJAL.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

上野 善道 (UWANO ZENDO)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構  
国立国語研究所・理論・構造研究系・客員  
教授

研究者番号：50011375

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし